

糸の多様性と刺し手の選択から生まれるこぎん刺しの価値 —津軽地方におけるこぎん刺しの真正性に注目して—

21H2011 石田 奈々

1. 研究背景と目的

現代のこぎん刺しは政治的動向や社会的な位置づけの変化により、配色や作品の自由化がすすみ、「古作こぎん」には見られなかった多様な材料が用いられている。そこで本論文では、津軽地方でこぎん刺しに使用される糸の多様性に着目し、素材や撚りなどの特性から「古作こぎん」に使用される糸との比較を通して、現代のこぎん刺しに用いられる糸の「真正性」を考える。さらに、津軽地方で入手できるこぎん糸の製造・販売者や刺し手たちの調査を通して、彼らのもつ糸の選定基準や価値観、思いを明らかにする。そして、津軽地方で入手したこぎん糸がもたらすこぎん刺しの価値について考察する。

こぎん刺しとは、青森県の津軽地方に伝わる伝統的な刺し子のことである。かつて「こぎん(小巾)」とは農民の労働着を指し、厳しい藩の規制により材料は麻に限られた。補強と保温のため麻布に麻糸で刺し子を施し、後に木綿糸の使用が許可されたが色は白に限られた。しかし、この規制によりこぎん刺しの藍染めの生地に生成りの麻糸という紺と白のコントラストが生まれたのである。明治時代以降、木綿衣類の普及によりこぎん刺しは衰退するが、柳宗悦が『工藝 第14号』(1932)で取り上げたことによって再注目され、衣類に限らずバッグやタペストリー等の布製品を装飾する伝統工芸品へと発展していった。現代のこぎん刺しは配色や素材の自由化が進み、刺し手が好きなように作品を作れる。本研究では、労働着として着用されていた時代の線対称で菱形の幾何学模様を紺の麻布に白の綿糸で刺したものを「古作こぎん」、禁令の解消により刺し手が素材や色、模様等を自由に選ぶことが可能になった後のものを「新作こぎん」と区別し、議論を進めていく。

ジェームズ・クリフォードの「芸術=文化システム」論によれば、創造物の社会的位置づけは「真正/非真正」と「傑作/器物」の軸で4つの区域に分類される。古作こぎんは当初、労働着として用いられた実用品であり「非真正な器物」に分類されるが、現代では青森県の有形民俗文化財に認定され、博物館等に収蔵されることで「真正な器物」へと移行したと考えられる。一方、新作こぎんは素材や色、模様等の多様化により、その多くは古作こぎんと形式が大きく異なる。このような状況において、人々が「真正なこぎん刺し」および「非真正なこぎん刺し」をどのように捉え、その真正性をどこに見出しているのかは必ずしも明らかではない。この点について本研究ではこぎん刺しに用いられる材料「こぎん糸」とその製造や使用に関わる人々の行動に注目して明らかにすることを目的とする。なお、本論文において「こぎん糸」と「糸」は同義であり、いずれもこぎん刺しに用いられる糸を指す。

2. 対象・方法

調査と分析は以下の手順でおこなった。3章では津軽地方で入手できるこぎん糸の多様性およびそれを使用する刺し手の多岐にわたる判断基準の広がりを中心に明らかにすることで、新作こぎんに使用される糸の実態に迫る。4章と5章では、新作こぎんに使用される糸を製造する人々や使用する刺し手たちが抱える価値観や思いを明らかにする。最後に、これら3つの分析を踏まえて素材や撚り等の特性から古作こぎんに使用される糸との比較を通して、新作こぎんに使用される糸の真正性を評価するとともに、津軽地方で入手したこぎん糸を用いて津軽地方でこぎんを刺すことの価値について考察する。

3. 津軽地方におけるこぎん糸の販売店と取り扱いこぎん糸の多様性

本章では、津軽地方でこぎん糸を入手することができる場の調査を通して、津軽地方で入手できるこぎん糸の実態に迫る。近年、こぎん糸は素材や色等の多様化が進み、刺し手の選択肢が広がっている。実際に弘前市内の手芸店4店で販売されている手芸メーカー糸について調査した結果、6つのメーカーの商品が取り扱われており、各メーカー内でも撚りや番手(太さ)¹、加工方法等の違いにより19種類の糸が提供されていた。これを色数まで含めると2,579種類に達し、その中で手芸店4店が取り扱う糸は1,840種類にも及ぶことが確認された。なお、

¹ 糸の太さを示す指標。恒重式番手では数値が大きくなるほど糸が長くなる。(松本陽一、2011、『はじめて学ぶ繊維』119)

以下では19種類の糸を①～⑱の番号で示し、整理・比較する。この19種類の糸を用いて実際にこぎんを刺した結果、「糸の太さによる模様の見え方」、「ラメ糸の刺しやすさ」、「撚りの解け方(糸のぼらつき方)」に特徴が見られた(写真1)。例えば、太さによる模様の見え方は、⑥4番手、④20番手、⑱30番手を比べると違いが分かりやすい。⑥は全体的にぷっくりとした模様に見えるのに対し、⑱の糸は細いため布との凹凸が少なく、布に馴染むような見た目となっている。そして、⑥は一目をすくう際にも目がしっかりと表に出ているのに対し、⑱の下段の一目は埋もれている。刺し見本の作成を通し、「太さ」は模様の見え方に、「ラメの有無」と「撚りの解け方」は刺しやすさと模様の見え方に大きく影響することが分かった。

6つの手芸メーカーの糸とは別に、津軽地方の手芸店や専門店が独自に開発した糸も販売されていた。色数を考慮しない場合、つきやでは7種類の糸が提供されており、中でも「みざらし」には、古作こぎんにも使用されていた生成りの糸が含まれている。一方、津軽工房社や虹色工房1chiでは、単色の糸に加え、グラデーション糸や草木染め糸も展開している。また、佐藤陽子こぎん展示館では、従来の糸よりも太い12本撚りの糸を取り扱っている。手芸店や専門店では、刺し手とのコミュニケーションや製造者自身の刺し手としての経験を活かしながら糸を開発してきたことが明らかになった。これらの糸の刺し見本も作成したが、本稿では割愛する。



写真1. 手芸メーカー糸を使った刺し見本
(出典)筆者作成

4. こぎん糸の入手における刺し手の選択—こぎんフェスから

こぎん糸の入手経路は店舗やネット販売にとどまらずイベントも重要な場となっている。なかでも弘前市で開催される「こぎんフェス」はこぎん刺しに特化したイベントである。本章では来場者が糸を購入するまでの決断プロセスやその際の判断基準を明らかにすること、そしてこぎん糸の判断基準を具体化し、現代の刺し手が糸を入手する際の傾向を明らかにすることを目的として、イベント来場者を対象にアンケート調査をおこなった。

調査は第11回こぎんフェスのイベントアンケートの裏面に質問を記載する形式でおこなった。総回答者306人のうち「こぎんを刺す」と回答した147人を分析対象とする。図1は「糸の入手経路」についての回答結果である。実店舗と回答した人が82人(70.1%)と最も多く、次いでネット販売15人(12.8%)、イベント9人(7.7%)という結果となった。さらに「その入手経路を選ぶ理由」を尋ねた結果、こぎん糸の種類が豊富が56人(41.2%)と最も多く、次いで入手が容易である44人(32.4%)、色の種類が多い35人(25.7%)となった(図2)。そして「こぎん糸の入手経路」と「入手経路の決定理由」をクロス集計し、入手先ごとに分析すると、実店舗ではこぎん糸の種類が豊富が50%、ネット販売では入手が容易が53.3%で突出していた。図3は「普段使用している糸」についての回答結果である。最も多かったのは津軽工房社の「津軽こぎん糸」であり15人(23.1%)が使用していると回答した。さらに「そのこぎん糸を使用する理由」では、色のバリエーションが多いが44人(38.6%)と最も多く、次いで品質が良い41人(36.0%)、色合いが美しい40人(35.1%)となった(図4)。このように白い木綿糸に限られていた時代とは異なり、現在は多様な基準で糸が選ばれ、自由な表現を楽しめるようになった。

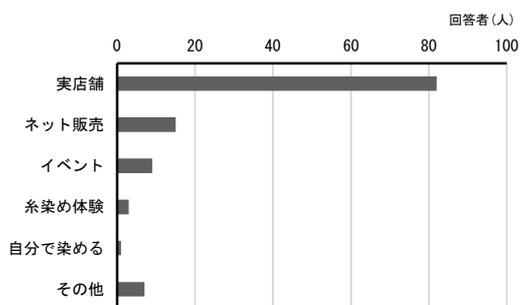


図1. こぎん糸の入手経路(n=117)
(出典)アンケート調査より筆者作成

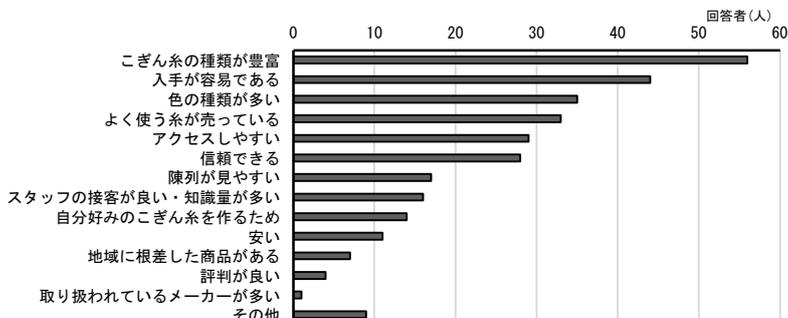


図2. こぎん糸の入手経路の決定理由(n=136)
(出典)アンケート調査より筆者作成

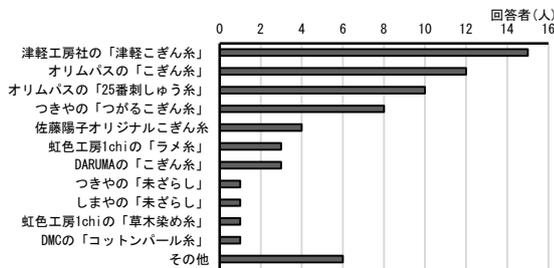


図3. 刺し手が使用するこぎん糸の種類
(出典) アンケート調査より筆者作成

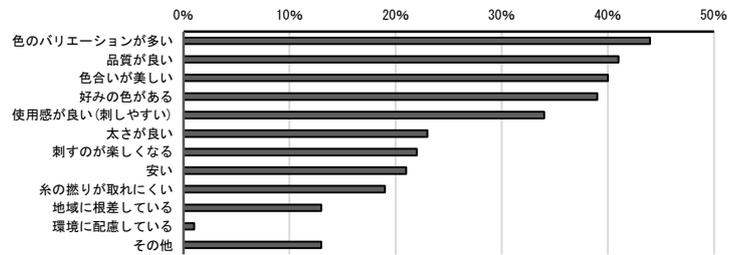


図4. 使用するこぎん糸の決定理由 (n=114)
(出典) アンケート調査より筆者作成

5. こぎん刺しとのかかわりからみるこぎん糸へのこだわり

本章では、津軽地方の刺し手が使用するこぎん糸へのこだわりを明らかにするために聞き取り調査を実施した。刺し手のライフヒストリーを中心に、彼らとこぎん刺しの関わりを探り、その背景にある価値観や思いに迫る。刺し手を「アートとしてこぎんを刺す人」、「趣味としてこぎんを刺す人」、「普及活動に努める人」の3つのカテゴリーに分類し、それぞれから調査対象を選んだ。

調査から、津軽地方の刺し手が糸を選定する際には、各々の目的や価値観が色濃く反映されていることが分かった。アートとして取り組む刺し手には、作品の独自性や視覚的なインパクトを重視する傾向があった。貴田洋子氏は日本現代工芸美術展や日展への出展を通じ、こぎん刺しをアートの領域にまで引き上げた。彼女が使用するDMC「25番刺繍糸」は鮮やかな発色と豊富なカラーバリエーションを持ち、伝統工芸を現代アートへと昇華させる役割を果たしている。趣味としてこぎん刺しを楽しむ刺し手には、刺しやすさや糸の特性を重視する傾向がみられた。専業主婦の棟方貴子氏は撚りがしっかりして毛羽立ちにくい、津軽工房社「津軽こぎん糸」を愛用している。また、大学生のA氏は作品のコンセプトに合う色彩を基準に糸を選び、イメージに合った糸で独自性を引き出している。糸選びは単なる素材選びにとどまらず、創作全体を左右する重要な要素となっている。こぎん刺しの普及活動に取り組む刺し手も糸選びに独自の視点を持つ。佐藤陽子こぎん展示館館長の佐藤陽子氏は、12本撚りの太いこぎん糸を独自に製造することで、模様が痩せて見える問題を解決した。また、地域の魅力ある商品としてこぎん刺しを題材に選び、顧客心理を活かしたマーケティングについて学ぶ青森公立大学・生田ゼミの学生は、制作目的に応じて糸の選択基準を変化させていた。ゼミでの商品制作では顧客ニーズを重視し、個人制作では自分の好みに基づく色選びをおこなっている。こうした結果から、津軽地方の刺し手たちの糸選びは目的や価値観によって多様化していることを指摘できる。アート作品での表現力、趣味としての使いやすさ、普及活動における提案など、多様な視点が現代のこぎん刺し文化を支えている。糸は単なる素材ではなく、刺し手の個性や思想を具現化する重要な要素であり、その選択がこぎん刺しの新たな価値を生み出す基盤となっている。

6. 「真正なこぎん糸」との比較

本章では「真正なこぎん糸」を「片撚りで光沢の少ない白い綿糸」と定義し、これとの比較によって手芸メーカー糸、津軽地方で製造される糸、津軽地方の刺し手が使用する糸の真正性を評価した。糸の「素材」と「撚り」を評価軸に設定し、図5に示した基準を用いて糸を分類した。真正なこぎん糸に最も近いのは片撚りの綿糸であり、最も遠いのは綿以外の素材で作られた諸撚り糸である。また糸の特性を評価するために、グラデーションやラメの有無、光沢の有無という2つの観点も基準に盛り込んだ。範囲Aが最も真正なこぎん糸に近く、範囲C'が最も遠い分類となる。なお、色は筆者が自由に設定したため今回の評価基準には含めていないが、必要に応じて言及する。

真正なこぎん糸との比較結果として、図6に手芸メーカー糸、図7に津軽地方で製造される糸、図8に津軽地方の刺し手が使用する糸の分類図を示した。図6の手芸メーカー糸19種類のうち、範囲Aに分類されたのは3種類であり、その中でも③DARUMA「こぎん糸 カード巻(未ざらし)」が最も真正なこぎん糸に近い。一方、範囲C'に分類された⑩、⑭はどち

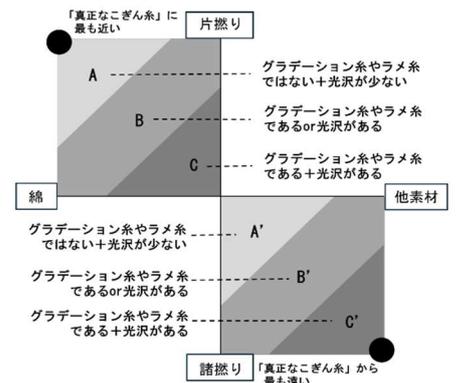


図5. 「真正なこぎん糸」との比較基準
(出典) 筆者作成

らもラメ糸である。図7の津軽地方で製造される糸は、多くが片撚りで光沢のない綿糸であり、真正なこぎん糸に極めて近い特徴を持っている。特に、つきや「みざらし 生成」は実際に古作こぎんにも使用されており、最も真正なこぎん糸に近いといえる。手芸メーカー糸と比較すると、津軽地方で製造される糸のほうが真正なこぎん糸との違いが明確である。図8の津軽地方の刺し手が使用する糸では、貴田氏が使用する⑩DMC「25番 刺繍糸」のみが、真正なこぎん糸から遠い分類となる。つきや「みざらし」、棟方氏やA氏、生田ゼミの学生が使用する津軽工房社、虹色工房 Ichi、佐藤陽子こぎん展示館の糸は範囲Aまたは範囲Bに分類され、真正なこぎん糸に近い特徴を持っている。以上の結果から、津軽地方の刺し手は、地元の糸販売店で製造された糸を多く使用しており、その多くが真正なこぎん糸に近い特性を持つことを指摘できる。

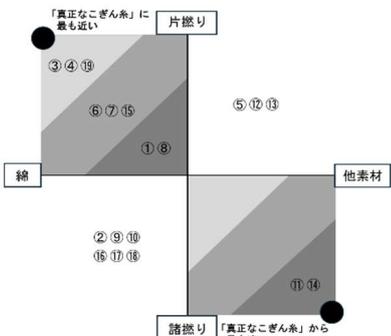


図 6. 手芸メーカー糸の分類図 (出典)筆者作成

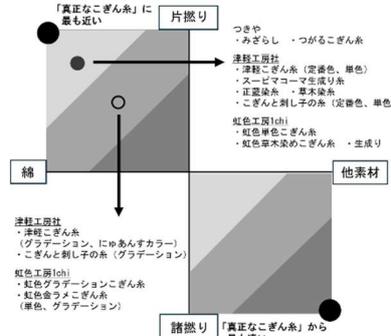


図 7. 津軽地方で製造される糸の分類図 (出典)筆者作成

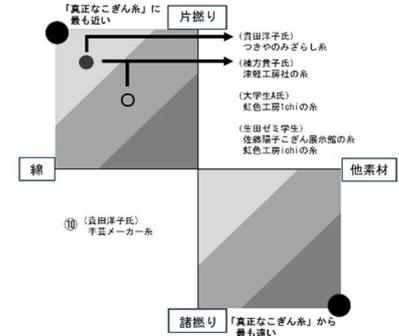


図 8. 津軽地方の刺し手が使用する糸の分類図 (出典)筆者作成

7. 津軽地方でこぎんを刺すという営み

本論文の最後に、真正なこぎん糸の枠組みから外れた糸がどのように受け入れられ、刺し手の創作活動に影響を与えているかを検討し、津軽地方で入手したこぎん糸を用いてこぎんを刺すことの価値について考察する。

津軽地方において、こぎん刺しが衣類の保温や補強を目的とした刺し子から発展して伝統工芸としての価値を確立するなかで、真正なこぎん糸は、片撚りで光沢の少ない白い綿糸と認識されてきた。しかし現代では多様な素材や色の糸が登場し、刺し手は用途や個性に応じてこれらの糸を自由に選べるようになってきている。この変化はこぎん刺しに新たな可能性を広げる一方で、伝統と創造の狭間で製造者や刺し手に葛藤を生じさせた。製造者は「伝統を壊したくない」という思いと「こぎん刺しを広め、楽しんでもらいたい」という願いの間で葛藤しつつ、伝統への敬意を保ちながらも枠組みを超えた糸の開発に取り組んでいる。刺し手も、真正なこぎん糸にこだわる人がいる一方、色や見た目を重視して現代的な糸を選ぶ人が増え、若年層や贈り物制作の場面での需要が高まっている。聞き取り調査においても、刺し手たちが伝統を尊重しつつ新たな表現を追求する姿勢が確認された。伝統と創造の間で模索しながらも自己疑念や批判と向き合い、次世代への継承と新たな価値創造を目指す製造者と刺し手たちの多様な表現こそが、こぎん刺しを未来へつなぎ、さらなる発展を支えている。

津軽地方のこぎん刺し文化は、伝統と創造性が交わり現代まで受け継がれてきた。それを基層で支えているのが、真正なこぎん糸に近い糸を製造・販売する人々の存在だ。彼らのつくる糸の存在ゆえに、刺し手たちは意識的であれ無意識的であれ、伝統を感じながら作品を生み出しており、津軽地方とはそうした環境が息づく場なのだ。一方、刺し手の中には、伝統的な古作こぎんに思いを馳せ刺し続ける人もいれば、特に歴史を意識せず自然と新たな価値を生み出す人もいる。それぞれの活動が文化の幅を広げ、次世代への継承を後押ししている。また津軽地方には文化施設や語り手が存在し、刺し手がこぎん刺しの背景や美意識に触れられる環境が整っている。このように津軽地方でこぎんを刺すことは、創作活動を越えた文化の継承そのものであり、糸製造者や刺し手、地域全体の連携によって、新たな価値を創出しながら発展し続けている。

参考文献 ※要旨中で言及したもののみ抜粋

ジェイムズ・クリフォード(2003)『文化の窮状 二十世紀の民族誌、文学、芸術』人文書院。
 松本陽一 (2011)「糸をつくる」信州大学繊維学部編『はじめて学ぶ繊維』日刊工業新聞社、116-131。
 横島直道(1974)『津軽こぎん』NHK 出版。